

# 言語技術教育について

——事実と意見を中心に——

岩 崎 淳

## 一 「言語技術」とは

ここでの言語技術とは、言葉によって、

- 1 事実や状況    2 意見や判断    3 心情

などを正確に伝えるための（そして受けとめるための）方法のことである。従来の学校教育では、3に関する教育は充分になされてはいるが、1や2に関しては、いっそう充実させる必要があるのではないか、という反省から、学習院では有志の教員が「言語技術の会」ということばの勉強会をつくり、1や2の伝達を主題とする言語技術教育の教科書の作成に取り組んできた。

すでに、次の四冊の教科書と一冊の教師用指導書とが完成している。

『ことばの本1 —— わかりやすい言い方・書き方 ——』

小学校三、四年生用

『ことばの本2 —— わかりやすい言い方・書き方 ——』

小学校五、六年生用

『ことば —— 言語技術1 ——』

中学生用

『ことば —— 言語技術2 ——』

高校生用

『ことば —— 言語技術2 —— 指導書』

現在は小学校用の指導書の原稿がほぼ完成したところである。教科書の内容配分表と目次を別表に掲げるので、ご覧いただきたい。なお、各章は、本文と問題とから成っている。

## 二 言語技術教育の目標

これらの教科書を使うことによって、言語技術の会では、生徒に次のような力を身につけさせたいと願っている。

事実と意見を区別することができる。

まぎれのない、正確な表現ができる。

筋道を立てて考えることができる。

人前でまとまった内容をきちんと話すことができる。

必要があれば、自分の意見を明快に主張することができる。

内容分類	(1) 事実と意見の区別	(2) 記述 事実・概念などの記述、説明 やり方、考え方、ルールなどの 説明	(3) 論述 話の組み立て、論理の組み立て 意見の述べ方 口頭発表 討論 説得	(4) 読み方 速読 精読	(5) 聞きとり方	(6) 要点把握 メモのとり方 伝達 ノートのとおり方 要約の書き方	(7) 段落（パラグラフ）	(8) レポートの書き方 人文 社会 理科	(9) 文章技術その他	(10) 言語習慣のちがい	(11) 資料のさがし方、使い方	(12) 会議の運営
小3、4	第2章	10 8	3			1、 5、 4 6			7、 9			
小5、6	第1章	5、 6	10 2		4	3			7、 9		8	
中	第1、2章	4 4	7 8 5 3	12	6	6		10、 14		13	11	
高	第2、3章		13 7 12			6		10 9 9 8	4	1	11	付録 1

『ことばの本1』(小3・4)の目次

章	内容分類
1 用事をたのむ	(6)
2 見たこと・考えたこと	(1)
3 考えをのべる	(3)
4 メモをとる	(6)
5 電話のかけ方・うけ方	(6)
6 まちがいなくつたえる	(6)
7 読点(とうてん)のつけ方	(9)
8 ことばでえがく	(2)
9 わかりにくい文	(9)
10 説明文を書く	(2)

『ことばの本2』(小5・6)の目次

章	内容分類
1 事実の文と意見の文	(1)
2 意見を述(の)べる	(3)
3 メモをとる	(6)
4 話を聞き取る〔テープ〕	(5)
5 見て書く	(2)
6 説明をする(道案内)	(2)
7 わかりにくい文・文章	(9)
8 事典で調べる	(11)
9 原稿(げんこう)用紙の使い方	(9)
10 討論をする	(3)

## 『ことば——言語技術1——』（中学）の目次

章	内容分類
1 富士山の見える日 事実と意見その一	(1)
2 サケの放流 事実と意見その二	(1)
3 意見を述べる 意見を読む 事実と意見その三	(3)
4 説明をする	(2)
5 人前で話す（スピーチ）（テープ）	(3)
6 話を聞き取る（テープ）	(5)(6)
7 説明をする	(3)
8 討論をする	(3)
9 段落（パラグラフ） 段落話題と中心文	(7)
10 レポートを書く（社会科）	(8)
11 図書館で調べる	(11)
12 速読に慣れる	(4)
13 アメリカ便り その一 言語習慣のちがい	(10)
14 アメリカ便り その二 レポートの書き方を習う	(8)
付録 話題、主題、その他の用語の解説	

## 『ことば——言語技術2——』（高校）の目次

章	内容分類
1 はっきり言おう	(10)
2 新聞を読む	(1)
3 事実と意見の書き分け	(1)
4 わかりやすい表現	(9)
5 段落（パラグラフ）	(7)
6 ノートをとる	(6)
7 口頭発表	(3)
8 レポート	(8)
9 レポートを書く（人文・社会系）	(8)
10 レポートを書く（理科系）	(8)
11 資料の使い方	(11)
12 推論の組立て方	(3)
13 デイベート	(3)
付録1 会議運営の原則	(12)
付録2 用語集	
付録3 テープ（「ノートをとる」の問題 3）の原稿及びノートの見本	

本質的には、論理的な思考力、表現力を育てるための教育である。そのために、いちばん良いのは、小学生の頃から、まともな考え方でそうでない考え方を見分けさせる感性を芽生えさせることである。小学生用の教科書に興味のある方は、本誌第十集の拙稿をご覧いただきたい。本稿では、事実と意見の区別に関する章を中心に中学生用の教科書を紹介し、高校生用の教科書についても簡単にふれるつもりである。

なお、言語技術の教育は、従来の国語教育を否定するものではなく、ましてや、日本人の言語習慣を否定するものでもない。「自分の意見を明快に主張する」というところに賛成できかねるという方もおいでのことと思うが、あくまでも、「必要があれば、そういうこともできるように」ということである。言語技術の教育は、今までの国語教育とは別の、もう一つの国語教育とお考えいただきたい。

### 三 「ことば」——言語技術1——

#### 1 「富士山の見える日」

次の文章は、『ことば——言語技術1——』の中の「富士山の見える日 事実と意見 その1」からの抜粋である。

人の話を読んだり聞いたりするときには、どこまでが事実で、どこからが筆者や話し手の意見かを意識することが大切である。まず次の文章を読んで、事実としての記述と意見の記述を比較してみよう。

#### 富士山の見える日

今から一〇〇年あまり前に、P・V・フィダーという人が、東京から富士山など東京周辺の山々が見えるかどうかを毎日調べた。彼は、東京大学の教師をしていたアメリカ人で、本郷の加賀屋敷に住んでいた。そしてその加賀屋敷内にあった観測台から、一八七七年（明治一〇年）一月二日から翌年の一月二日まで、毎日朝の七時と昼の一時半との二回、観察を行ったのである。

彼の記録によると、この三〇五日間に、富士山の見えた日が八九日ある。平均では一か月に九日弱、つまり週に二日も見えていたことになる。この数から推定すると、年間に少なくとも一〇〇日は東京から富士山が見えていたにちがいない。フィダーの観測から九〇年後の一八七七年（昭和四二年）一月一日から一年間、こんどは気象庁予報課の清水教高氏が、渋谷区のある歩道橋の上から、毎朝八時過ぎに、富士山が見えるかどうかを調べた。清水氏によると、その一年間に富士山の見えた日は三九日であった。明治一〇年には、月に九日近くも見えていた富士山がわずかに月に三日あまりしか見えなくなったのである。

富士山が見えにくくなったのは、大気が汚れたためであろう。なぜなら、東京の天気は下表のように、明治一〇・一年よりむしろ昭和四二・四三年の方がよいからである。

（以下本文省略。また、明治一〇・一年と昭和四二・四三年の東京における快晴日数を示した表を載せているがそれ

も省略した。)

問題一 本文第二段落の三つの文の各々は事実としての記述か筆者の意見や判断を述べた文か(どちらでもない文もあり得る)。

問題二 「事実としての記述」のようであるが、筆者の意見や判断を含んでいる文がある。本文全体からその例をさがせ。

第二段落の第一文は事実としての記述である。フィダーの記録を調べれば、「三〇五日間に、富士山の見えた日が八九日ある」かどうかがわかる。第二文は「週に二日も見えていたことになる」というところに筆者の判断が含まれている。「週に二日しか見えていなかった」という表現と比較すれば、それは明らかであろう。第三文は「この数から推定すると」「見えていたにちがいない」などの部分から、意見の記述であることがわかる。

問題二の答えとして、右の文章の中からは、「明治一〇年には、月に九日近くも見えていた富士山がわずかに月に三日あまりしか見えなくなったのである」という文が指摘できる(本稿で省略した部分からも、別の文が指摘できる)。傍線の部分に筆者の意見が示されている。

事実としての記述とは、例えば、自然の法則や現象、過去に起こった出来事などの記述のように、それが真か偽かを客観的に確認できるものである。

意見には、妥当な意見とそうでない意見とがある。妥当な意見とは、真の事実に基づいて、正しい論理にしたがって導かれた意

見のことである。一方、論理の誤りや飛躍のある意見、論理を抜きにした感情だけの意見は、妥当でない意見となる。また、判断の根拠になっっている事がらの内容が、真の事実でなければ、その意見は妥当な意見とは言えない。

「富士山の見える日」の第四段落で、筆者は「東京の天気は汚れている」という判断(意見)を示している。その根拠は次の二点である。

①フィダーの記録(明治一〇・一一年)では、本郷から富士山の見えた日は三〇五日間に八九日である

②清水氏の観測(昭和四二・四三年)では、渋谷から富士山の見えた日は一年間に三九日ある。

①と②の内容に誤りがあれば、筆者の判断は成り立たなくなる。仮に、フィダーの記録を調べたら、富士山の見えた日は八九日ではなく、二九日だったとしたら、この意見は妥当な意見とは言えなくなる。(※注)

しかし、その場合でも、第二段落の第一文は、やはり事実としての記述である。その記述であるということと内容の真偽とは別の問題なのである。

日常生活では、「事実」という語が、「真実」の意で用いられ、「それはほんとうです」と「それは事実です」とが同じ意味で使われることがある。が、この教科書では、「事実である」と「真実である」とを区別している。「Aさんは一九五〇年に生まれた」という記述の場合、この文をいくらいいねいに読み直しても、ほんとうにAさんが一九五〇年に生まれたかどうかはわからない。

それを確かめるためには、Aさんの運転免許証や住民票などを調べなければならぬ。つまり、「事実である」を「真実である」の意とすると、ある記述が事実か否かは言語技術の問題ではないことになってしまうのである。

しかし、「Aさんは一九五〇年に生まれた」という記述を見れば、真偽の判定ができる具体的な記述であることがわかる。言語技術の世界では、ある記述が、「ほんとうかどうか」は問題としないで、「事実としての記述かどうか」だけを取り上げる。したがって、「Aさんは一九五〇年に生まれた」という記述は、真偽は（この記述だけでは）不明だが、「事実としての記述」であると認定できる。

＊注 ①と②の内容が正しくとも、考え方の筋道に誤りがあれば、言うまでもなく、「東京の天気は汚れている」という判断は妥当な判断とは言えなくなる。この文章の場合、「富士山の見える日」の筆者に対していくつかの反論が考えられよう（例えば「わずかなデータだけで結論をだすのは不適當である」など）。もちろん、筆者の側からの再反論も可能であろう。

## 2 授業報告

この「富士山の見える日」を使って、私は二度授業をしたことがある。対象はいずれも中学三年生である。導入の部分で、次のような例文を使って、事実としての記述か、意見の記述か、その他の記述かを考えさせた。

1、山田さんのわき見運転が事故の原因だ。

2、山田さんのわき見運転が事故の原因だと私は思う。

3、のぼる君はテニスが上手だ。

4、のぼる君はテニスが上手だと私は思う。

5、徳川家康は江戸幕府の第三代将軍である。

6、徳川家康は偉大な将軍であった。

7、昨日のR中学校との試合で、わが校は三対二で圧勝した。

8、あなたは中学生ですか。

答えは、1は事実としての記述、2は意見の記述、3は意見の記述、4は意見の記述、5は事実としての記述、6は意見の記述、7は意見の記述、8はその他の記述ということになる。足慣らしといったところだが、まちがえる生徒も多い。

次に、生徒自身に、事実としての記述か意見の記述かを問う問題（右の1から8のような短文）をつくらせ、その答えと理由を書かせて提出させた。

その際、友達が見て、事実か意見か迷ってしまうような難しい問題であることという条件を付けた。

生徒の日常生活では、事実と意見を区別しなければならぬ場面はそう多くはない。あまり切実な問題ではないので、興味をもてない生徒もいるのではないかと考えた。その場合、「富士山の見える日」から入ったのでは、一方的な受け身の授業になる可能性があった。なんとか生徒の頭を刺激し、興味を持たせよう、問題文を作成させたのだが、この試みは予想以上にうまくいった。勉強というよりもゲームクイズをしているという感じがしたのかもしれない。級友同士、廊下を歩きながら、「これは事実か意

見か」などと問題を出し合う姿も見受けられた。「富士山の見える日」へもスムーズに進むことができた。

また、生徒の理解度を知るという点でも問題文を作成させたことは大変役に立った。自分で作った問題であっても、解答が間違っていたり、理由が不適当であったりすることもあり、どういったところが生徒は弱いのかということもおおざっぱにつかむことができた。中には私の方が判別に苦しむ問題もあり、教えられるところが大きかった。

生徒の考えた問題文を次にいくつかあげる。

a 死んだ母のつくった料理はうまかった。

この文を考えた生徒の答えは、「意見の記述」で、理由は、「お母さんは死んでしまっているのです、その料理がうまいかどうかは確かめられないから」ということだった。この文が意見の記述であるのは、「うまい」という評価を表すことばが使われているためである。母親が生きていて、「母のつくる料理はうまい」という文であっても、やはり意見の記述である。「真か偽かを客観的に確かめられる」ということばを誤解しているのである。

この生徒の考え方でいけば、「今朝、私は七時に起きた」という文の場合、家族と暮らしている人の場合は事実としての記述で、ひとり暮らしの人の場合は意見の記述ということになってしまう。  
b きのおう、私は死んだ。

「死んだ人間が文を書けるはずがないから、意見の記述である」という解説がついていた。しかし、医師に一度死亡したと判断された人が、生き返ったという状況であれば、事実としての記述と

なる。また、「昨日までの自分をすてて、新しい気持ちで生きていこう」とう意味の文学的な表現であるならば、意見の記述となる。文学的な表現（「メロスは激怒した」「我輩は猫である」など）を事実か意見かという観点から考えなければならないことは、日常生活においてはほとんどない。文学的な表現を事実か意見か判断させる場合は、問題のための問題となりやすいので、慎重に考える必要がある。

c 富士山は、日本では高い山である。

「日本でいちばん高い山であるから、この文は事実としての記述である」と書いてあった。「富士山は高い山である」ならば意見の記述であるが、「日本では」という条件がつくと、判断に苦しむ。他の会員に聞いてみたところ、その人の答えは「事実としての記述であるが、『富士山』の部分に、高い順に二番目、三番目と次々と山の名が入った場合、何番目から事実としての記述でなくなるのかは分からない」ということだった。

### 3 その後の学習

『ことば——言語技術1——』では、「富士山の見える日」に続いて、「サケの放流」、「意見を述べる 意見を読む」といった章で事実と意見に関する学習を深めていく。以下、簡単に各章についてふれておく。

「サケの放流」 事実と意見 その二

この章では、「サケよ元気で戻れ 子供らの夢を背に稚魚十万



「旅立つ」と題された新聞記事と、この種の運動に対して批判的な新聞記事とを読ませることによって、事実と意見の読みわけを訓練し、また一つの事実に対してもいろいろな見方（意見）がありうることを、事実の報道を主体とする記事にも実は一つの主張（意見）が隠れていることに気づかせることを目的としている。

記事の文章の各部を、記者自身が見た事実の記述、記者が他人から聞いた事実の記述、記者の推測・判断の記述、他人の推測・判断（一般におこなわれている推測・判断をふくむ）の記述などに分けるという練習問題がある。さほど複雑、難解な文章ではないのだが、取り組んでみると、予想以上に手強い問題である。事実と意見を区別することの難しさと重要性をあらためて認識する生徒も多い。

「意見を述べる 意見を読む」 事実と意見 その三

自転車利用者が歩行者には邪魔者扱いされ、自動車にも追い立てられる苦しさを訴えた投書に対して、三つの投書が寄せられる。それらを材料に、意見を述べるには、自分の感情をむき出しにぶつけるのではなく、きちんとした根拠に基づいて筋道を立てて論を展開しなければならないこと、また意見を読むときには書き手の使う言葉の響きにこまかされてはいけないことを説明している。

#### 四 『ことば —— 言語技術2 ——』

『ことば 言語技術2』の「事実と意見の書き分け」の章で初めて、読み分けのほかに、書き分けるときの諸注意が示される。

また、この章だけではなく、「レポート」（全部で三章ある）、「推論の組立て方」などの章でも、具体的な注意点を学ぶ。「新聞を読む」の章では、事故の報道を例にとり、活字になった文章を無批判に受け入れる姿勢をいましめ、「本に書いてあるから正しい」と言う考え方はなぜ望ましくないのかを考えさせるようになっていく。

この本の大きな特長は、「ディベート」という章が入っていることであろう。ディベートとは、ある問題について、肯定派と否定派に分かれ、一定の形式と順序に従って論争を行い、勝敗を争う競技である。裁判における検事側と弁護側との論争を考えてくださればよい。この章では、授業時間内に扱えるように簡略化したディベートのやり方を、例を示して説明している。この本を使って、実際にディベートを行っている学校もある。

高校における言語技術教育は、「国語表現」や「現代語」との関連において考える必要があろう。学習指導要領で望んでいることと、言語技術教育で目指していることは、方向が一致していると私は考えている。（「国語表現」の「2 内容」のイとウ、「3 内容の取扱い」の2と4、「現代語」の「3 内容の取扱い」の1、3、4などを読むとその感を強くするのだが、いかがだろうか）。選択制ということもあり、カリキュラムの中に比較的组织み入れやすいのではないかと思う。

〔付記〕

本稿は平成元年十一月の早稲田大学国語教育学会例会での発表

をもとに加筆訂正を加えたものである。

(学習院中等科)

〔編集部注〕

言語技術の教科書についての問い合わせは左記で受け付けている。

〒一七一 東京都豊島区目白一の五の一

学習院大学文学部 教職課程事務室

電話 〇三・三九八六・〇二二一 内線七五〇

また、朝日新聞社から次の本が出版されている。

言語技術の会編『実践・言語技術入門』朝日選書三九六